

約100名のホームヘルパーに認知症についてのアンケートを行ない 見えてきたもの

世田谷区社会福祉事業団 ホームヘルプサービス認知症専門チーム

発表者：高木 すみ子・坂本 絹子

共同研究者：芳村 裕子・井川 眞美・風戸 直美

<研究目的・意義>

認知症高齢者の半数以上は在宅で暮らしており、その数は年々増加し約10年後には今の倍以上に達すると言われている。認知症になっても安心して暮らせるよう在宅生活を支えていくための私たち介護職の役割は大きい。私たちの事業所では平成21年度よりサービス提供責任者で「認知症」の専門チームを組み研修や自主勉強会を行ってきた。学習を深めていく中で、見たままの判断でしか捉えていなかったことに気づかされた。認知症を正しく理解し利用者の心理・行動・背景を考え、立ち止り色々な側面から課題を整理し様々な視点をもって理解し利用者一人ひとりを見て支援していくことの大切さを痛感した。そこで、まず利用者の一番近くにいるホームヘルパーに「認知症を知り」「認知症の人を知る」ことをテーマに研修とアンケートを行なった。研修前と研修後に考えや視点にどのような変化があったか、そこから見えてきたものを報告する。

<研究方法>

「認知症」を正しく理解するため1年を通じて2回の研修と3回のアンケートを実施。

- 1、研修前アンケート実施
- 2、研修計画
 - ①研修前アンケート分析
 - ②研修内容検討
 - ③研修後のアンケート
- 3、研修の実施
 - ①事例から学ぶ認知症高齢者への対応
 - ②認知症の基礎知識
- 4、研修前後のアンケートの分析

ホームヘルパーは、利用者宅を訪問しサービスを行っている。認知症の方の対応がうまくいかず悩んでいたり不安を持ちながらも、わかっているつもりケアを行っていることがアンケートからもわかった。認知症の方の心の中には何があるのか、何が起きているのか、心理・行動の意味を理解し何となくできるケアではなく、「その人」を「知って・わかって・出来るケアを目標」に認知症の人を支援していく。